

文学的テキストの特徴を探る

—英語授業における学習者の反応から—

久世 恭子

はじめに

本発表の目的は、Virginia Woolf, *A Room of One's Own* を精読する大学英語授業における学習者の反応を複数の視点から分析し、英語教育における文学教材の意義や役割を探ることである。

第二言語・外国語教育における文学は、1980年前後に主に英米で再評価されて以来、情意、文化、言語などの各観点からその意義が主張されてきたが、近年、テキストの読解過程や学習者の反応など実証的なデータの収集に関心が集まっている。本発表では、これまで報告が少なかった、難解なテキストを精読する授業に焦点を当て、論理的なテキストとの比較も考慮に入れることによって文学的テキストの特徴を探る。

研究の概要

本発表では、首都圏にある女子大学で発表者が2014年度に担当した英文学科2年生の通年必修科目 *Intensive Reading* の授業を分析する。受講生数は23人で英語能力は大多数がTOEFL-ITP 520点以上と推定される。対象の学科では3年次より英語関係の各専攻に分かれ、英米文学コースに進む予定の者は1名であった。

対象教材は、後期に使用した Virginia Woolf, *A Room of One's Own* (以下、Room) であるが、同じクラスで前期に用いた Bauer & Trudgill (eds.), *Language Myths* (以下、Myths) にも言及する。Myths は言語に関する神話(伝説)について言語学者たちが専門知識を用いながら一般人向けに解説し議論する、極めて論理的な要素の濃い文章のコレクションである。Room について「文学的」という曖昧な表現を用いるのは、これまでの研究で文学の定義に成功したものはほとんどなく、また、この作品についても大学のカリキュラム上は文学と見なされていないことなどから¹、「文学」と断言するには議論の余地を残すからである。しかし、発表者はこの作品は多分に文学的な特徴を持つと考えており、従って、本発表の事例研究で得られる結果は外国語教育における文学教材の利用の研究に広く応用できるものであると確信している。

授業の展開を紹介すると、まず、第1回授業では、授業者である発表者が Virginia Woolf とその作品について概要を説明し、その後で受講生に Woolf の書いた遺書を配布してグループごとに内容や印象について話し合ってもらった。補足説明をした後で、映画 *The Hours* 冒頭のシーンをクラスで鑑賞した。第2回以降の授業では、毎回2名の発表担当者を決め、本文1ページ半程度の担当箇所を割り当てた。発表の前にはレジュメを配布することとしたが、その際に読みのポイントとなる箇所を取り上げて問題を作成し、難解な語句の意味や背景知識については説明を加えるように指示した。授業中は、クラス全員がテキストを精読してきていることを前提に発表担当者を中心に授業を進め、授業者が言語的・内容的に重要と思われる点を補った。その他、アイデアを整理するためにワークシートを用いたり、イメージがとらえにくい場面では絵を描いたりという活動も取り入れた。1学期間でカバーする範囲については予め決めず、少なくとも Chapter 1 を読み終わることを目標とした。

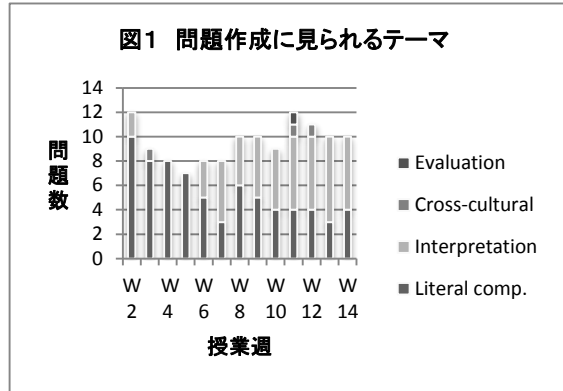
データ収集は、発表担当者のレジュメ、アンケート、フォローアップ・インタビューから行った。分析の方法として、まず、レジュメに作成された問題を Kim (2004) がリーディング・サークルでのディスカッションの分析に用いた5つのカテゴリー (literal comprehension, interpretation, personal connections, cross-cultural themes, evaluation) を用いてコード化した。アンケート調査では、受講生がこの作品の精読を前期の Myths の精読と比べてどう感じたかを調べるために「むずかしさ」「面白さ」「英語力向上」の観点を設定して自由記述してもらい、回答をグループ化して分析した。また、読む際にどのような点に関心を持ったか、受講生が問題を作成するという授業の方法についてどう感じたか、などについてもアンケートとインタビューで質問した。

受講生が作成した問題の分析

発表担当者がレジュメに作成する問題はテキストを精読する際の関心を示すものであると想定し、それを先述の5項目を用いてコード化した。例えば、literal comprehension に区分される典型的な問題は、「～を日本語に訳して下さい」「～の it は何を指しますか」などの和訳や文法に関する問題である。それに対し、interpretation は、「pp.12-15 を読んで、Manx cat は何を象徴していると思いますか」「どうして probably, hope がイタリック体で書かれているのか考えてみましょう」など深く考え解釈を必要とする問題である。

図1は、レジュメに作成された問題のテーマが授業の進行に従ってどのように変化していったか示したものである。実際に授業が始まった第2週から第5週まではほとんどの問題が literal comprehension に関するものであ

ったが、次第に interpretation が増えていき、後半ではその数が literal comprehension と同数か、時には上回っていることがわかる。この変化の理由は、授業が進むにつれて受講生が作品に慣れ言語的な意味を理解するだけでなく深く解釈する余裕が生まれたことと、前半でのクラスの読み方を反映させて意識的に解釈への関心を向けるようになったことの両方であると考えられる。Cross-cultural themes に関しては、問題としてではなく、説明として各レジュメに3点ほど付記された。



アンケート・インタビューの結果

アンケートでは、最初に、Room の特徴として感じたことを Myths と比較しながら予め設定した観点から書いてもらった。「むずかしさ」の観点からは、「作者が何を言いたいのか、理解することがむずかしかった」という回答が最も多かった（回答数8）。次に、「単語の意味をとること」「背景知識がない」「意識の流れ」がいずれも回答数4であった。「面白さ」についても、「むずかしさ」の場合と同様に約半数の受講生が、「作者の意図をつかむこと」を挙げた（回答数9）。次いで「背景知識、文化と合わせて読み解くこと」（5）、「フェミニズム」（4）であった。「英語力向上」の観点からは「文法力の向上」と答えた受講生がもっとも多かった（9）。Room には長い文が多く、特別な文法知識を必要とするような文は少ないものの倒置や挿入が頻出するので、そのようなスタイルに慣れていない受講生には Room は Myths に比べて文構造が複雑だと感じられ、それが「文法力の向上」という回答に結び付いたのだろう。他に「英語力向上」に関して、「読解力向上」「訳・日本語への置き換え」（各4）、「深く考える姿勢が身につく」「表現のゆたかさ」（各3）を感じたとの回答があった。

次に、それぞれの作品を精読する際にどのような点に関心を持って読んだか調べ、その結果を表1にまとめた。両作品とも「英語の意味を理解すること」「解釈すること」が上位を占めているが、Myths では「英語の意味を理解すること」に、Room では「解釈すること」により多くの関心が持たれたことがわかる。「外国の文化を学ぶこと」への関心も高く、特に Room では半数を大きく超える受講生がこの点に関心を持ちながら読んだと言える。

表1 関心を持って取り組んだ点(複数回答可)(n=21)

関心を持った点	Room	Myths
英語の意味を理解すること	14	18
解釈すること(作者の言いたいことなど)	19	12
自分の経験に結びつけること	0	4
外国の文化を学ぶこと	13	6
作品を評価すること	4	1

受講生が問題作成をするという授業のやり方については、「(問題に答える側として)理解が深まった」(7名)、「問題を作るのは難しかったが勉強になった」(5名)、「他の人の作問や視点の違いが勉強になった」(3名)など概ね肯定的な評価を得た。一方で、この方法について「(レジュメを授業直前に配布するので)予習として取り組めないことが大変」「試験対策がわからない」(各3名)という感想もあった。

フォローアップ・インタビューでは、Room について、「内容はとても面白いけれども難しかった」という感想を全員が述べた。「今まで読んだ英語の文章の中で一番難しかった」と言う受講生もいたが、「面白い」と「難しい」は自分の中で両立するものであると説明していた。「概念的なものを問われているので、それをつかむのが難しい」という感想も聞かれたが、これは「解釈することが難しい」というアンケート結果と一致する。また、「前に書いてあることが後で出てきて、それがわかった時がとても嬉しかった」と、この作品には「わかる喜び」があるという感想を述べ、それができたのは細かく正確に読む精読を行ったからだ読み方に関する発言につながった。読み方については、他の受講生も「この作品は速読で読んでもわからない」あるいは「本当の良さがわからない」と同意していた。言語的には、「単語の意味が今まで知っていたものと違うことがあり、その発見が楽しかった」という発言があったが、これを苦勞と思う受講生もいただろうということは推察される。また、背景知識が必要とされることについて、「自分は興味を持てたが、イギリスへの興味、文化・歴史的背景がないとつらいかもしれない」という指摘があり、この点は文学的テクストを扱う際の留意点として示唆に富んでいる。その他、「興が深くて、『ウルフ、すごいな』と思いながら読んでいた」「ウルフを大学時代に読めたということが、一つ意味がある」など率直な感想も聞かれた。

Myths との比較という観点からは、「Myths はここが説明でここが結論だという論理構成がはっきりしていた。でも、こちら (Room) は、流れるようで」と、Woolf の文章の特徴である「意識の流れ」を指摘する発言もあったが、全員が強調した 2 つのテキストの違いは「前期は説明文で、書いてあることが全てという感じだった」、つまり、文字通り読んだことがそのまま作者の言いたいことであり、決まった答えが必ずテキストの中に書かれていたのに対し、Woolf は、テキストを基に推測したり解釈したりしながら作者の意図を探らなければならないということであった。

考察

本発表では、文学的なテキストは精読の授業でどのような関心を持って読まれるのか、また、学習者はそのようなテキストの読解や活動をどう感じるかについて、受講生のレジюме・アンケート・インタビューを用いて質的研究を行った。

Room の授業で発表担当者が作成した問題には、literal comprehension, interpretation に関するテーマが頻出し、「テキストの内容を正しく理解する」「解釈する」ことに重点が置かれたことがわかった。また、この「解釈する」という要素は精読の授業を重ねていく中で次第に増加したことが観察された。学習者がより自主的・積極的に作者の意図を推測したり作品のテーマについて解釈したりするようになったと言える。

対象授業でこのように学習者のテキストへの深い関わりを可能にしたのは精読という方法である。難解なテキストを用いて文学的な活動を行うためには、まず言語的な問題を解決し、そこから解釈や推論などの段階へ移行していくべきで、その点で精読は不可欠であると言えるだろう。

Room の精読を学習者の視点から Myths の場合と比較してもらった結果は、Myths では文字通りの英語の意味を理解することが中心であり、Room では英語の意味を理解した上で作者の言いたいことを推し測ったり解釈したりすることにより多くの関心を持ったということである。文学とそうでないものとの間に境界線を引いて明確な違いを示すことはできないとしても、少なくとも対象授業において学習者たちはこのような異なる関心を持って 2 つのテキストを読んだということは示すことができた。また、Room の読解においては、予想以上に文化的・社会的背景知識の持つ影響が大きかった。受講生の多くは当時の文化や社会状況に関心を持ちながら読み、そのような作業を難しいが面白いと感じていた。英語力向上という観点からは、難解な文章の読解を通して文法力を養えたという指摘だけでなく、わかりやすい日本語に置き換えるという作業を通して「日本語能力も鍛えられる」という反応があった。

最後に、本発表の事例のように文学作品を扱う授業で考慮されるべき問題として、「精読すること」と「解釈すること」のバランスを挙げておく。活動と評価の両方において、この「言語的な能力」と「文学的な能力」の比重はそれぞれの授業の目的に合わせて慎重に検討されるべきであると改めて感じた。

おわりに

本発表では、言語的にも内容的にも難しい文学的なテキスト精読する授業を取り上げ、学習者の関心と反応を複数の視点から検討した。分析の結果得られたのは、言語的な意味をつかむことのみにとらわれず、作者の意図を理解しようとテキストと対話するように読み進める学習者の姿勢であり、そのような作業を「むずかしいが、面白い」と感じる反応であった。その点で文学的テキストは英語教育において情報のみを伝える論理的なテキストとは異なる役割を担えるのではないかと考えている。

註

1. 対象授業では「原則として文学以外の作品」を用いることがコース・コーディネーターからの指示に明記され、その上でこの作品が候補として挙げられている。発表者はこの場合の「文学以外」は「小説以外」を意味していると推測している。

参考文献

- Bauer, L. and Trudgill, P. (eds.) (1998) *Language Myths*. London: Penguin.
- Kim, M. (2004) Literature Discussions in Adult L2 Learning. *Language and Education* 18 (2): 145-166.
- Woolf, V. (1928/2004) *A Room of One's Own*. London: Penguin.